〔兵庫〕

平成29年度の総会･研修会を開催

兵庫県支部長　25期　古沢　公一

平成29年7月29日（土）午後3時より、神戸市の兵庫県柔道整復師会館に於いて同窓会総会・研修会を開催しました。学校より田中勇二教務主任のご来臨を賜り、支部会員15名が参加しての総会となりました。

報告事項として、20周年記念事業は役員・会員の日程調整が出来ず再検討することになりました。（申し訳ありません）

研修会は講師に昨年同様（株）エヌディエスジム＆スタジオNeeDsの中務正幸先生をお招きし『運動やスポーツの複雑な動きをシンプルに捉えてコンディショニングに繋げるNTM』と題した特別講演を開催しました。

講演時に中務先生は、何度も元に戻り復習。エビングハウスの忘却曲線の示す意味を理解させながらの研修会となりました。

総務委員長の笹岡先生、京都府支部長の田中先生、奈良県支部長の前田先生にもご参加いただき感謝しております。また、ご参加いただいた皆様（一般参加者を含め30名）、お忙しいところ本当にありがとうございました。

年が明け、田中教務主任より平成30年度の学生募集についての協力依頼があり、早急に支部役員会に諮り兵庫県支部役員にご協力をお願いさせていただきました。

ひとりでも多くの生徒が入学されますことを切願いたします。

中務正幸先生

〔大分〕

「べっぷ鶴見岳一気（いっき）登山第30回記念大会」

大分県支部長　14 期　清田　洋一

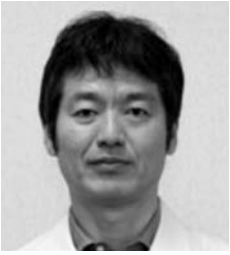
毎年4月の第2日曜日に開かれるこの一気登山大会は、湯の町別府を見下ろし、別府温泉の源脈である海抜1,375メートルの鶴見岳に、海抜0メートルのスタート地点から、全く自動車道を通らずに登頂する全国唯一のユニークな大会である。この大会の当初から、参加者の影の（基本的には登山であるから自己責任であること）救護班として、大分県柔道整復師会は40程のボランティア団体の一つとして、別府地区会員3名を派遣している。

大会には、限定200名が頂上目指して一気に駆け上がる「いだてん天狗タイムレース」、全行程12キロを歩いて登る「のびのび桜ウォーク」、ふもとまでの健康ウォーク「ゴーゴーゴーハーフウォーク」の3コースがある。通算参加者は6万7千名となった。

登山道に入ってからは無線、2つの山岳会と協力して柔整師会が参加者を守る。3名は、ふもとの大会本部、途中の林道入り口、頂上（ゴール地点の建物）に待機して活動する。過去の例としては、7合目付近で両脚痙攣を起こし動けなくなった女性。頂上のスタッフが現地まで約20分、登山者をかわしながら下り、シートを敷き手当。1時間ほどの処置で無事、共に頂上に（このようなときは、強いマッサージはダメ。ごくごく軽い処置に徹すること）。9合目位だったか、処置の後山岳会と5名ほどで布製の簡易タンカで担ぎあげたこと。ゴール地点で過呼吸症候群を起こした人、途中で転んだ人の処置等。林道入り口で途中リタイアを勧めた人も。過去に死亡事故など重大事故がなく本当によかった。

この大会は、鶴見岳が与えてくれた人生道のようでもある。即、人々の笑顔のため、いろんな人たちが自分の持てる力を提供し、そして目的を達しさりげなく帰っていく。今後も笑顔の源泉でありつづけるように願っている（大会の帰りはロープウェーが利用出来る。詳細は別府市観光協会、ネットでも）。

柔道整復を学ぶ学生の「今昔」



大阪府　35期　葉山　直史

縁あって他校の柔道整復学科教員となって18年になりますが、私自身の学生時代の経験と合わせて、柔道整復を学ぶ学生の「今と昔の違い」について書かせていただきたいと思います。

まず一つめは、大学卒や社会人経験者の学生が著しく減って、高校新卒入学者の割合が大幅に増えました。以前はさまざまな年齢の色々な経験を持つ大人が多く、いわば社会をギュッと凝縮したような構成でしたが、今は若々しい、キャンパスに近い雰囲気に変わっています。また、以前は「柔道整復師になって儲けたい」と口にする学生がいましたが、今はそんな声を聞くことはなくなりました。最近の学生の多くは、いわゆる“ゆとり世代”で、彼らは“さとり世代”ともよばれるように、“堅実で高望みをしない”ので、「たくさん稼いでいい暮らしをしたい」とは考えないようです。志望動機で多いのは「ケガをしたとき治してくれて、精神面も支えてくれた柔道整復師さんに憧れた」というものです。これは今も昔も同じかもしれません。

さて、違いをもう一つ。先日、第26回柔道整復師国家試験の合格発表が行われましたが、合格者数は3,690名、合格率は58.4%でした。ちなみに、第1回国家試験のときは合格者数が1,066名、合格率は90.3%でした。いわゆる14校時代と比べ、合格者数が増えていることはよくご存知だと思いますが、実は合格率が驚くほど低くなっているのです。

合格率が低下した原因として思いつくのは、「受験者の学力不足」、「国家試験が難しくなった」の2つではないでしょうか。

確かに、“ゆとり教育”と“少子化”の社会で育った彼らの多くは、勉強で大きな挫折や壁にぶち当たることを経験せずに専門学校入学に至ります。例えば、ある高校三年生の入学志願者を面接したとき、部活でレギュラーをつとめながら、調査書を見ると学業も好成績でしたので、「文武両道だね。クラブ頑張りながら勉強もして、大変だったでしょう?」と聞くと、「いえ、別に…。だって『これを覚えておけば80点以上取れるから』とA4のプリント一枚をもらえるので、それくらいの成績は普通に取れます」と返されました。驚きましたが、どうやらその高校だけが特別というわけではないようです。

そんな学生たちですから、医学を学び始めて苦戦するのは当然です。しかし、彼ら“さとり世代”は、言われたことに従って行動することに関しては、昔の学生より素直です。そして“堅実”な彼らは、国家試験受験時には昔の学生より高い学力を身につけるのです。にもかかわらず、合格率が低くなったのは、国家試験の難度が上がっているからなのです。

今年合格した3,690名は、そんなハードルを乗り越えて、柔道整復師の資格を得た精鋭たちです。「儲けたい」と“高望みをせず”、純粋に柔道整復師の仕事に魅力を感じて、この世界に飛び込んだ彼らを、先輩たちが歓迎し、ともに柔道整復の将来を築く、そんな業界であってほしいと祈るとともに、私もその一人として微力ながら尽くしていきたいと思っています。

第26回日本柔道整復接骨医学会学術大会レポート

大阪府　広報担当理事　49期　西原　義昭
広報委員長　49期　高橋　和也

平成29年11月3日（金・祝）～4日（土）、表記学術大会にわが「大阪行岡整復同窓会」を代表して学術委員会からの発表があり、早速取材へ行ってきましたので当日の内容をレポートいたします。

今回の大会テーマは「地域のゲートキーパーとしての柔道整復師」－安心・安全な柔道整復の提供のために－と題して、グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）にて開催されました。

昨今、柔道整復師の質や倫理観の低下が叫ばれている中、「柔道整復師の在り方」についてスポットを当てるものとなり、とてもタイムリーな内容となっていました。今大会は8年ぶりの大阪での開催であり、国への請求の根拠（エビデンス）を示す上で重要な位置づけとなる大会となりました。

会場：グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）

八木良憲会長と今村智彦学術委員長

われわれの臨床現場で多くみられるテニス肘（外側上顆炎）やゴルフ肘（内側上顆炎）ですが、鑑別診断にはいわゆる基本的な検査法Chairテストや抵抗負荷等をかけて診断に導いていきます。

今回、学術委員会では学術委員会終了後の定例勉強会で筋系解剖やその筋機能に重点を置いて研究しておりましたので、上腕骨から付随する手関節の伸筋群、屈筋群の起始・停止部、主な機能に着目し、通常の検査法では大まかで不十分であった筋肉の機能異常を詳細に判定、どの筋肉に起因するのかを明確にするため個別的に解析するというものです。

柔道整復師に永く求められてきた医学的スタンダード（医師から求められる医学的根拠）に繋げるための目的があり、充分それに応えられる可能性があること、またその方法は高価な計測機器を用いなくとも徒手のみの検査で医学的、論理的証明が可能で柔道整復師の神髄である非観血療法にも通じるものであること、また学校の教科書にも載っていない内容で現在の養成校教育への提言という意味も込められています。

発表は短い限られた時間でしたが内容も濃く、「大阪行岡整復同窓会」の活動をアピールする良い機会であったと思います。